

2021年12月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

煙突に名乗る伏見湯天高し
梳かるるがまま換毛の秋の駒
青北風や新たに現るる島のあり
古稀前の終の献血九月尽
唐箕漕ぐ音軽ろやかに伊勢平野
青き穂を風の味方に荻なびく
狭庭辺を宇宙としたる子規忌かな
秋蟬や台座崩れし武家の墓
製塩の土器のかけらや草紅葉
ドラキュラめく喉の渴きよ紫蘇ジュース
七歳の手土産二十世紀梨
家計簿に日記一行つづれさせ
坂道の多き漁港や秋の風
ポー川の朝霧を捲きコンバイン
椽の実をさらし縄文めく暮し
一叢のさ揺ぐ白よ貴船菊
乱雑に資料積み上げ夜なべかな
刈跡に百舌の高鳴き響くとき
大原の里に秋風野辺に行く

傾げ見る洋書背文字に書肆の秋
長き夜や深く漂ふモルトの香
星月夜笛の音遠く遠くまで
犬をれば試してみたり猫じやらし
栗剥くや網代の夜なる波静か
龍淵に潜む夜明けのひかりかな
デジタル式地球儀回し夜半の月
秋郊の一草となりバスを待つ
笥の音土にひびけり曼珠沙華
空の国境越へてゆくなり翺雲
小さき手に合掌数へ墓参
秋の虹貨車を通して消えにけり
島々に架くる橋殖ゆ翺雲
初鴨の声にたかぶる暁の沼
太刀魚を捌けば長き卵かな
初心者の刈田に鳥の多きとも

氷壺集

仁田 浩
朝田玲子
古川邑秋
野木正博
西村みゑ子
河村純子
中井昭雄
佐々木成
木村静子
大石高典
小寫 和
森すゞ子
富沢壽勇
鴻坂佳子
川上和昭
酒井富子
益子桂子
栗本一代
片山旭星

氷室集

仁田 浩
片山旭星
河村純子
富沢壽勇
朝田玲子
田中 勝
古川邑秋
山本京子
福江ちえり
森 壹風
碓氷芳雄
真下章子
木村静子
佐々木成
大石高典
宮原亜砂美

名月は予報通りよ雲間より
営業の旗の失せたる崩れ築
十五夜の雲の流れの疾々と
餌を狙ひとんぼ動かぬず蠅地獄

石原ゆき子
酒井富子
益子桂子
南田美恵子

2021年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

傾けてボンベ転がす西日中
蟻螂の浮く逆光の真昼どき
秋立つや重さかはらぬ小銭入
虫に逃げられし鳥逃げ初嵐
松明は地元産なり門火焚く
滑舌のよき商人や柘榴割る
蚕屋のにはほひ土蔵にありし終戦日
復元の動かぬ水車秋暑し
鎌濡れてからむし刈りの朝まだき
かまきりの力抜きたる雨上がり
鳳仙花赤毛のアンのひとりごと
最北の夏の日の出や礼文島
坂道を一気に降りて夏の子に
かつて何をしてゐしか原爆忌
灼けし岩くたくだく発破よダム工事
斎王の禊の浦や虫の声
ゆうらりと七節ゆれて一步また
ジャスミンの香に夜の庭のただならず
噴水へ近づいて来るハイヒール

氷壺集
仁田 浩
朝田玲子
古川邑秋
南田美恵子
大石高典
富沢壽勇
西村みゑ子
鴻坂佳子
栗本徳子
真下章子
前田鈴子
中井昭雄
河村純子
川上和昭
佐々木成
山中ひでの
中島冬子
酒井富子
益子桂子

氷室集

御陵の北半分の夕立かな
将来のご近所に会ふ墓参かな
子には子の食べ方のあり枝豆も
立秋や地球の土に茶わん焼く
斑猫に見惚れて道を迷ひけり
夜の明くる前の静寂よ原爆忌
初秋や波打ち際のシュノーケル
八月や豪雨止まざる夜は長き
流灯や暗きに跳ぬる魚の群
炎天やトラムの軋む棕櫚並木
棚経や草履の小僧小走りに

仁田 浩
朝田玲子
山本京子
谷口文子
佐々木成
田中 勝
碓氷芳雄
石田祥子
富沢壽勇
鴻坂佳子
木村静子

吸盤をひとつ残して章魚が逃げ	大石高典
夕されや庭師ひきあげ秋立ちぬ	古川邑秋
円周率知つてをるかや向日葵よ	河村純子
水桶にきうり三本午睡あと	森 壹風
むくむくとポパイ現はる雲の峰	石原ゆき子
待合室の一等の席小鳥くる	前田鈴子
避難指示あけ六つの火の大文字	栗本徳子
故郷はいまだ村なり吾亦紅	酒井富子
速達の封書の重し梅雨の闇	西五辻芳子

2021年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

	氷壺集
たくましき顎もて摺む箱眼鏡	仁田 浩
急雨来る地塘に群るる糸蜻蛉	野木正博
放たれし馬の躍動梅雨晴間	朝田玲子
蟬声や授業にならぬ一限目	中島冬子
旧字体の角川文庫合歓の花	古川邑秋
振り上げし釣竿の先雲の峰	大石高典
清流にまかせる籠に瓜二つ	中井昭雄
文豪の旧居への路時計草	鈴木春菜
「治山治水」の額ある生家梅雨出水	西村みゑ子
短夜や明るくなれば起くる日々	川上和昭
日盛や木の柵尖る関所址	真下章子
炎昼や牛舎は暗き窓並べ	小 篤 和
運河また風の道なり夏柳	鴻坂佳子
ときどきは遠嶺を仰ぐ蓴採	佐々木成
振花を残して庭の草を刈る	富沢壽勇
遠雷やしまひしままの将棋盤	木村静子
膝濡らし孫太郎虫誘き寄す	西五辻芳子
雨の夜のひとむら半夏生の白	酒井富子
梅干すやおもちやの如露の俄雨	前田鈴子
	氷室集
滝音に負けず話へ戻りけり	仁田 浩
広島空へ鳩舞ふ原爆忌	碓氷芳雄
夕焼やジュラ紀の空がここに現れ	森 壹風
夫のくれし白日傘こそけふの日に	朝田玲子
何用があるぞ夜更の蝸牛	小 篤 和
振花や世代交代ままならぬ	谷口文子

馬刀つかむ腕の力のいや増しぬ
業平の橋に留まる蛇蜻蛉
流れ来る潮の匂ひや二重虹
汽水湖へ展くホームや閑古鳥
葛饅頭ひたしひたひた水の音
行き帰り石に動かぬ川鶉みて
雷鳴を数ふる間なくすぐそこに
やんはりと歪む視界の花氷
涼しさや魚の棲みゐる鍾乳洞
クマノミの切手や夏休みの子らへ
松原に涼しく鳴くよ黒鶉
梅雨の月あればほんのり富士の影
初蟬は参道横の木立より
大鍋の蝦蛄剥く母の手際美し

大石高典
西五辻芳子
古川邑秋
鴻坂佳子
富沢壽勇
酒井富子
田中 勝
益子桂子
南田美恵子
真下章子
佐々木成
丹羽康夫
片山旭星
山本京子

2021年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

枇杷の実の高きは鳥に残したり
実梅落つ甘き香りの粉挽場
田植機のとくに乱るる苗の列
宇治川に雲のかかる日新茶買ふ
苗打ちの名手こそぞりて下手投げ
商家出の母の手捌き鱧料理
枝つかみゐて汲み上げし山清水
牧場へ坂また坂の花空木
泥深く足跡残し田植終ふ
尺蠖が卓の長さを計りをり
麦藁帽柴漬漁の川漁師
庭石に脱ぎ捨つごとと蛇の衣
殻あるがゆゑの愛嬌かたつぶり
梅雨晴間特等席は猫のもの
無花果や無口な夫の地獄耳
毒草と媪囁くジギタリス
語り部の世代交代慰霊の日
何も置かぬありがたさなり夏座敷
遅刻せし生徒の配る李かな
空想に耽る午後なりかたつぶり

栗本徳子
朝田玲子
仁田 浩
小 瀧 和
古川邑秋
鴻坂佳子
野木正博
佐々木成
益子桂子
中島冬子
川上和昭
酒井富子
南田美恵子
河村純子
西村みゑ子
西五辻芳子
福地義雄
片山旭星
大石高典
氷室集
朝田玲子

夏来る腕に覚えの伝馬船
濃あぢさゝる修行の僧の行く小路
幽霊飴舌に転がす夏夕べ
積雲の高さ御苑の夏木立
溺れかけし不測や伊豆の土用波
雉子鳴けり手つかずにある畑は森
十葉や裏木戸細く開けてあり
薔薇香る暗き座敷のその奥に
足浸す湯気の傍ら登山靴
枇杷の実やすぐ仲良しに女の子
結といふ仕来り消えて田植かな
玉虫の死し千年の光りとも
夾竹桃と原爆ドーム雨やまず
梅雨滂沱本能のまま危機回避
古代湖や見渡す限り布袋草
伊勢と知多つなぐ夕虹明日は晴
郭公のめつきり減りし空うつろ
風鈴に風の音色を託しけり
古稀なりと前列に座す夏期講座

仁田 浩
中井昭雄
谷口文子
小 瀧 和
碓氷芳雄
古川邑秋
真下章子
河村純子
酒井富子
鴻坂佳子
大野邦夫
森 壹風
田中 勝
宮原亜砂美
大石高典
山中ひでの
佐々木成
片山旭星
森川恵美子

2021年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

みどりの日つい雑草に依怙最眞
回路図は頁見開き梅雨に入る
光耀のステンドグラス夏はじめ
カウベルの音して牧に夏兆す
ハンモックしばらく私達の空
得心のいかぬ論文初蚊出づ
吉野川より分水の代田かな
象潟や植田に浮ぶ九十九島
夏めくや髪結び上げ出勤す
敷石の縁取りなせり苔茂る
一塊の石がダビデに古都の初夏
万緑の上に廊あり東福寺
農小屋より足出してゐる昼寝かな
はつなつや猫の見つむる竿の先
学寮より遙か雲間の五月富士
赤城山けふはくつきり新茶汲む

朝田玲子
仁田 浩
中井昭雄
川上和昭
鈴木春菜
大石高典
古川邑秋
佐々木成
三原真紀子
益子桂子
鴻坂佳子
小 瀧 和
木村静子
西村みゑ子
富沢壽勇
酒井富子

吊橋の先一面の桐の花
万緑の櫟野寺巨いなる秘仏
ドラえもん欲しきと願ひ春逝かす

甘噛みを素知らぬ馬よ若葉風
城跡に戦国遠しソーダ水
薄端の似合ふ床の間花菖蒲
石楠花や肩をすくめて応へたる
ドローンとは雄蜂のこと我が頭上
オーボエの響きたゆたふ聖五月
トロッコの名残の線路山桜
三光鳥威嚇する猫よそ目がち
星の夜やバナナ静かに熟されて
川波の光静かな立夏かな
東京といふ故郷や吊忍
母のひざの団扇の風に寝入りけり
ドラキュラのごと羽広げ川鶉啼く
漫画本に腕の重さよ昼寝覚
農休み待ち実家へと柏餅
水の地図の刻々変はる田植時
廃寺跡ひろびろと飛ぶ夏燕
短夜や明恵上人夢日記
御喋りが迷惑となり山女釣
背に負ひし甥は古稀とや桜の実

南田美恵子
栗本徳子
河村純子
氷室集
朝田玲子
碓氷芳雄
古川邑秋
仁田 浩
大石高典
富沢壽勇
佐々木成
河村純子
宮原亜砂美
田中 勝
谷口文子
山本京子
森 壹風
小寫 和
森 幸子
益子桂子
木村静子
片山旭星
南田美恵子
山中ひでの

2021年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

山辛夷寄りゆくほどに匂ひなく
利腕の指太やかに新茶摘む
母牛を離れぬ仔牛山笑ふ
永き日や窓の大きな食堂車
緑摘むこと実習の始めとす
感嘆詞幾つも付けて春の山
三等三角点ここに花吹雪
四肢の揺れ定まりすくと仔馬立つ
出漁のエンジン音や朝雲雀
花人と目が合ふ庭の筵かな
校庭の残花に雨や新任地

氷壺集
仁田 浩
中島冬子
川上和昭
鈴木春菜
小寫 和
河村純子
野木正博
朝田玲子
佐々木成
三原真紀子
益子桂子

霾やモンゴル文字は縦書に
栖鳳の屋敷に寄つて鳥帰る
若芝や禁じられたるうさぎ跳び
鳶かと惑はすごとき紙鳶かな
鶏の長鳴きの午後木瓜の花
独り来し氷室の桜けぶり見ゆ
花菜漬一夜を借りし寺の朝
若狭湾敦賀湾よと桜鯛

遠足の海に燥ぎて山の子ら
蛇穴を出づ川幅の狭き土手
かりかりと餌食む音よ春の暮
うららかや磁器婚式と貝拾ひ
一と夜さの雨に芽吹けり小町塚
行く春や灯火消さぬ記念塔
啓蟄や何か出さうな松の洞
樹海にて磁石誤作動春の雲
救急箱使ふことなく春休
新緑の谷や尾灯の赤き列
弁当の隙にと摘んで鶯菜
迅雷や折しも月の朔日に
霾やハルマッタンの砂の粒
寛げば枝葉の音や春の森
曇りきて色あはあはと蓮華草
追ひ追はれ刻み足なり雉の雄
長藤の揺るる先なり能舞台
川底の浅きに出づる泉かな
雨垂れの打てば揺るる葉蛙啼く
基地の中の夾竹桃や明易し

大石高典
山本真也
古川邑秋
富沢壽勇
真下章子
西五辻芳子
中井昭雄
前田鈴子
氷室集
仁田 浩
古川邑秋
河村純子
田中 勝
佐々木成
小寫 和
西五辻芳子
吉田達哉
谷口文子
碓氷芳雄
三原真紀子
山本京子
大石高典
野木正博
朝田玲子
南田美恵子
丹羽康夫
富沢壽勇
森 壹風
志多伯節子

2021年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

きつね雨過ぎて桜の三分咲き
手の長き猿が餌欲る日永かな
公魚のぴくりぴくりと魚信あり
鶯が百座踏破を祝ひくれ
お水取の闇打つ雨や僧白衣
鶏頭の種蒔く窓に見ゆる庭

仁田 浩
小寫 和
大石高典
野木正博
栗本徳子
古川邑秋

屋根替や奪衣婆に降る茅の屑	真下章子
ターバンに似て非なるかなチューリップ	富沢壽勇
アンデスの朱鷺色の塩鱈焼く	西五辻芳子
菜の花やぐいぐいと空押し上げて	朝田玲子
熟するを待つアボガドや日の永し	川上和昭
よく食べる猫と本日春休	河村純子
よなぐもり退職届ポケットに	山本真也
掛軸に巻癖のあり雛飾る	酒井富子
光り落つる雪解雫や廃校碑	佐々木成
薄紙の皺ふんはりと雛納	益子桂子
門前の梅かはたれのバイク音	鴻坂佳子
この先は踏ねば行けぬ落椿	中島冬子
鳥寄せの体験初め山笑ふ	南田美恵子
	氷室集
名水を汲むや伏見の花の下	仁田 浩
斧音のこだまに明るる春の柚	佐々木成
涅槃図や牛の後ろに猫丸く	古川邑秋
芳草や道草せむと馬の寄り	朝田玲子
逆光の瀬戸の多島や暮れかぬる	碓氷芳雄
啓蟄や増ゆる人出を避けて虫	大石高典
病癒ゆる東寺の僧よ花月夜	河村純子
辛夷咲くスカイツリーを果てに見て	小嶌 和
この小間にみな寄つて来る春炬燵	小川妙子
患者みな番号に呼ぶ春深し	酒井富子
林道の水たまりだに蝌蚪の群	野木正博
瀬戸内や音かりかりと潮干狩	田中 勝
喝采の声上ぐるごと白木蓮	富沢壽勇
葦牙や歩く速さの屋形船	鴻坂佳子
北に地震南に地震や落椿	谷口文子
春分や緑色岩の板碑群	森川恵美子
跳ぬる子の足元そこに土筆生ゆ	宮原亜砂美
二度寝せる産卵終へし赤蛙	丹羽康夫
あたたかや黒目を入るるぬひぐるみ	真下章子
合否待ち無重力めく受験生	小堀恭子

2021年5月

氷華集	当月の雑詠から尾池和夫抄出
	氷壺集
炙られて反り正されて干鰯	朝田玲子

寒雷の一つ激しく独りの夜
書き入るる予定の未来三月来
地固めの音の響くや木の芽風
表裏使ひ切る紙二月尽
立春や仙石線の外は真白
三寒の坪庭に差す薄日かな
春潮の尾道水道山迫る
たうたうと坂東太郎雪濁り
踏むまいぞ尻つくまいぞ露のたう
虫喰ひの苗木余分に寒肥す
青き踏む雑草といふいのち踏み
冴返る記憶を覚ます夜の地震
江戸風に困ふ上野の冬牡丹
亀鳴くや化学とにかく苦手なり
寒明くる大文字山人多し
一列の練行衆やマスクして
海風に遊ばれてをり崖すみれ
冴返るおくどさん置く曼殊院

後醍醐院の吉野や春は遠からじ
砂抜きの浅蜷くつろぐ塩加減
本流へ支流割込む春疾風
校庭の記念樹小さし名残雪
鈍行の窓や飛び来る波の花
山茶花や集合写真つつましく
古文書の土蔵や梅の花盛り
立春や屋根まだ白き石巻
富士山の横へ伸びたる初電車
杉玉の酒屋に春の川の風
家が鳴るまたびしと鳴る春一番
沢庵の旨み引締め寒戻る
陵の森に消へゆくうかれ猫
真ある鬼になりたや寒念仏
冬の鹿すつと現れすつと消え
東山白々と明け初音かな
海苔粗朶に影を落して着陸機
川涸るや毎日渡る大井川
下萌や順路の坂に子規の句碑
春寒し音なく吹くでなき風に

佐々木成
河村純子
富沢壽勇
鈴木春菜
小寫 和
栗本徳子
仁田 浩
酒井富子
中島冬子
大石高典
川上和昭
益子桂子
鴻坂佳子
古川邑秋
野木正博
栗本一代
木村静子
片山旭星
氷室集
河村純子
朝田玲子
真下章子
碓氷芳雄
佐々木成
仁田 浩
木村静子
小寫 和
大石高典
山本京子
谷口文子
宮原亜砂美
古川邑秋
富沢壽勇
西五辻芳子
野木正博
中村順次
丹羽康夫
鴻坂佳子
田中 勝

2021年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

人気無き舞台は寒し人恋し
黒潮に乗り来たるらむ初明り
かはるがはる寒禽来鳴く芭蕉像
風音の隠岐より届く寒卵
バオバブの梢が春をつまむやう
子の声の少し変はりて鬼は外
たてがみの刻むリズムに雪が跳ね
数へ日や計画になき町へ行く
梅大きこの大福茶いかにせむ
行く先の吾を見据ゑて冬満月
羽子板の裏絵に世相ありにけり
同じ刻同じことして去年今年
待春や囲ひし野菜とり出しぬ
砂防ダム丈を競りあふ氷柱かな
白葱を刻んで僕は強くなる
仮の世の伊勢や広野のかぎろひに
ゆつたりと使ふひと日や日脚伸ぶ
春待てど桜古木の伐られけり
寒梅や少年高くみくじ結ふ

霜柱十五センチの靴の跡
漬樽の重し下がりぬ二月はや
風花や言葉少なき友の茶毘
核兵器禁止条約初明り
数の子の薄皮老眼鏡かけて
竜の玉ラピスラズリの化身にや
ガムランに影絵の浮かぶ冬茜
試みる京の雑煮のかしら芋
天空に光撒くごと寒北斗
のの字まで十日と少し大根干す
声あげて泣くこと知らで雪見草
水槽の魚寄り合ひ春を待つ
小寒や通勤のごと熊二頭
門松は榊なりしよ上総郷
忘るるも世過ぎのひとつ初日記
踏みしむる音のたのしき霜柱

氷壺集

河村純子
仁田 浩
佐々木成
栗本徳子
大石高典
三原真紀子
朝田玲子
鈴木春菜
小 瀧 和
富沢壽勇
古川邑秋
中島冬子
益子桂子
野木正博
山本真也
西村みゑ子
真下章子
荒木昭代
森すゞ子

氷室集

碓氷芳雄
宮原亜砂美
佐々木成
田中 勝
河村純子
朝田玲子
富沢壽勇
小 瀧 和
古川邑秋
仁田 浩
斎藤よし子
益子桂子
丹羽康夫
鴻坂佳子
中野 梓
木村静子

枝の目印辿り歩くよ雪の山	野木正博
雪だるま尾灯消したる闇のなか	西五辻芳子
改良の文字に買ひたる胼薬	南田美恵子
白味噌の中のつこつと雑煮餅	谷口文子

2021年3月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

	氷壺集
落鱧の細長き貌捌きけり	大石高典
お齋なら出汁の沁みたる大根とも	栗本徳子
山眠るカミオカンデはこの底に	仁田 浩
参道や咳止め飴の今昔	富沢壽勇
冬木立大地に影の瘦せ細り	古川邑秋
常のごと凶面描くなり漱石忌	小 瀧 和
過去となる地層の上の落葉踏む	河村純子
茶の花や茶師貫きし人に供花	中島冬子
寒き指に毛刈りの馬のすべすべと	朝田玲子
雄松の葉雌松より鋭し年用意	西五辻芳子
老神父の握手ぬくとしクリスマス	佐々木成
どれどれと婆腕まくり大海鼠	前田鈴子
重詰の一角のみが減つて行く	山本真也
冬うらら屋根に魔除の竜の這ふ	木村静子
内に曲がる氷柱ずらりと北の軒	益子桂子
地中よりの水の旨さよ霜柱	野木正博
冬眠や亀の居場所の衣装箱	南田美恵子
杖が身の一部となりぬ冬の月	山中ひでの
冬の虹生家あたりに今日も立つ	真下章子
	氷室集
日本史の頁の染みよ薩摩汁	碓氷芳雄
山頂のポストや雪は払はれず	河村純子
冬ぬくしお薬手帳忘れてたり	仁田 浩
冬うらら人に流され伊勢詣	宮原亜砂美
この歳の坊主頭や枇杷の花	古川邑秋
人車てふ鉄道のある冬ぬくし	富沢壽勇
実千両竜馬泊りし浦の宿	木村静子
能登半島波たたせては鯛起し	野木正博
赤蕪の芯まで赤く博打めく	大石高典
窓開けて換気十分漱石忌	小 瀧 和
トンネルをあまた抱きて山眠る	真下章子

初雪やソーラー発電停止中	益子桂子
閉校の門扉の錆や冬に入る	佐々木成
罎の手の指紋認証不可となり	南田美恵子
味のしむ卵なによりおでん鍋	田中 勝
カシミアのセーター一生ものと決め	石田祥子
牡蠣喰ふや二人暮しに殻の嵩	前田鈴子
貴女蘭の種こぼさじと煤払	丹羽康夫
度忘れの多き二人の日向ぼこ	酒井富子
水涸るや鶴の噴水ビル仰ぎ	鴻坂佳子

2021年2月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

咲き初めしサフランの蕊真紅なり	小寫 和
朝露や杜の奥なる灯火二基	栗本徳子
てつちりや隣の席も死の話	鈴木春菜
室花や眠気はらふに伸びをして	益子桂子
落葉踏む鳥を驚かさぬやうに	河村純子
紅葉濃し蟻の戸渡り四つん這ひ	野木正博
百態にくぬぎ降り散る揚抗比	朝田玲子
煙吐くあとひと雨の煙茸	仁田 浩
鯨死して途端に色の変はりけり	大石高典
しぐるるや京は西入ル東入ル	古川邑秋
ふいに鳴く杜の懸巢よ立ち竦む	佐々木成
産土の家に誰が住む冬鴉	鴻坂佳子
山梔子の葉が妙に好き冬の蠅	西五辻芳子
あるじ無き庭に獅子柚子ぐらんぐらん	富沢壽勇
秋鱈を堤防に干し志摩の暮れ	西村みゑ子
かの人とわかる仕草や頬被り	森 幸子
脚一本すてて遁がるる冬の蠅	中島冬子
懐手龍馬のやうに生きたしと	川上和昭
権の樹や光残して裸木に	栗本一代
	氷室集
時雨ては北山杉の遠ざかる	小寫 和
渋柿の渋とけさうな陽の光	仁田 浩
山を背に冬日をしぼし余呉の湖	栗本徳子
宿題の合間あひまの木の実独楽	佐々木成
秋暮るるさしたる話なきままに	河村純子
秋夕焼池塘に空の色のあり	野木正博

出陣の緋色のごとき冬紅葉	益子桂子
海鼠腸の伸び縮みしてしごかる	朝田玲子
一畦を囲ひしみの冬構	古川邑秋
若たばこの荷台やジャズの町の昼	牧田満知子
ここの在りとして竜胆の埋もれず	宮原亜砂美
鱸の子勢ひ込んで釣れにけり	大石高典
初時雨降りし証の石畳	片山旭星
雲水の声重なる冬の朝	谷口文子
銅像のたれとは知らず落葉降る	木村静子
置炬燵子は寄りつかず鬼ごっこ	大野邦夫
ガラスペン握れば小春日和かな	斎藤よし子
東京の水甕のダム浮寝鳥	中村順次
九州場所の居反りや教へ子の力士	南田美恵子
我家まだ昭和の暮し衣被	長浜利子

2021年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

秋日和輪ゴムの朽ちし包解く	仁田 浩
エスプリは長寿の薬味十三夜	川上 和昭
穴まどひ古地図の中の大井川	大石 高典
わが馬と分かつ林檎や試合果つ	朝田 玲子
ため息のやうに湯気吐く焼占地	小 鷲 和
軸の端のこんと打ち鳴る秋の風	栗本 徳子
大粒がきちんとふたつ落花生	鈴木 春菜
村ぢゆうの柿採り尽し柿の村	古川 邑秋
関ヶ原見ゆる城址に秋思かな	富沢 壽勇
枯蓮や猫啞へ来る魚の骨	中井 昭雄
舞ふ人と月とひとつに音のあはひ	河村 純子
戦中の火点の残る芒山	佐々木 成
柳散る水府提灯ともす酒肆	鴻坂 佳子
白秋忌見舞かなはぬ母へ唄	西五辻芳子
十二曲り秋の錦の火打山	野木 正博
ロックフィルダム嫺やかな谷紅葉	中島 冬子
暮れ方の残照余韻秋惜しむ	片山 旭星
椎の実干す母の手もとを日だまりに	栗本 一代
薄紅葉此処にて三人殺されし	山本 真也

氷室集

保津峡を抜け冬霧の攻め来たる
月の出を待つ間に雲の流れけり
藁塚の伏兵めきて散らばれり
琵琶湖疏水抜けていきなり天高し
先導は奥駟道の飛蝗なり
颱風を忘るる鳶か明石灘
後れ蚊の刺すに思はぬ疾さのあり
摩天崖の空より紅葉始まりぬ
秋色のへばりつきたる余呉湖かな
戦国の城下を今に稲架襖
秋深し小説にある後日譚
一村にいまだ案山子の居続ける
波音や秋菜莢熟るる蚕の径
赤い実へつぎつぎ違ふ小鳥来る
潮の音のとどく社や松手入
見はるかす霧の風伝おろしかな
響き渡る防災無線いわし雲
やや寒の一点集中轆轤の座
秋深し一村の絵のアダンの実
群白く豊漁のごといわし雲

仁田 浩
片山 旭星
木村 静子
河村 純子
野木 正博
朝田 玲子
富沢 壽勇
山口 容子
大石 高典
碓氷 芳雄
小嶋 和
古川 邑秋
佐々木 成
酒井 富子
鴻坂 佳子
西五辻芳子
真下 章子
宮原亜砂美
牧田満知子
田中 勝